

ゐましたが、小さな玩具太鼓がどん／＼轉げて來るのを見ると、

「太鼓さん／＼、あなたは赤ちやん羊に逢ひませんでしたか」

とききました。赤ちやん羊はまた太鼓の中に小さくなつて

「火の中へ落ちてしまつた

お前も今に落ちますよ

そーら 鳴れ 鳴れ 小さい太鼓

タムバ タムトー タバム タムトー」

といりました。けれど豺は赤ちやん羊の聲をよく覺えてゐましたから

「お、赤ちやん羊、お前は太鼓の中にはひつてゐるね、さうだらう」

と云ひながら、小さい玩具太鼓を破つて、一呑みに肥つた赤ちやん羊をたべてしまひました。(西印

度伽嘶)

### ○正直お爺さん

或る處に、大そう貧乏なお爺さんがあつた。このお爺さんはまた大層<sup>スナホ</sup>正直な善い人だつた。それで近所の人達はお爺さんのことを「正直爺さん正直爺さん」と云て居た。

正直爺さんは、いつも、お椀を持つて居た。

そのお椀はた／＼と太鼓のやうになつた。正直お爺さんは大層貧乏だつたから、毎日彼處<sup>アツチ</sup>此處<sup>ココチ</sup>と乞食をして歩いた。或日、他處<sup>ヨソ</sup>の家へ行つて、何か食べる物を下さいと云ふと、其處の家の者は、

「あつちへお出、あつちへお出、正直お爺さん、

お前になんかやるものは、いつまでたつてもないよ」

と云つた。又次の家へ行つて何か食べる物を下さいと云ふと、其の家の人も、

「あつちへお出、あつちへお出、正直お爺さん、

お前になんかやる物は、いつまでたつてもない

よ」

と云つた。三番目の家へ行つて何か食べる物を下さいと頼んだが、其處の人も、

「あつちへお出、あつちへお出、正直爺さん、お前になんかやる物は、いつまでたつてもないよ」

と云つた。いちばんおしまひに、村はづれの小さい家へ行つて、何か食べる物を下さいと云つた。

すると、小さい男の兒が戸口の處へ出て来て、

「おはひり、おはひり、さあ、おはひり、正直お爺さん、食べる物なんか、家になかつたら、ど

こからでもさがして来てあげるよ」

と云つた。正直お爺さんは、早速例のお椀を出した。そしてお米を入れてもらつたが、入れて見ると、半分程しかなかつた。それからもつと持つて来て入れたが、まだ一ぱいにならない、またあとからたしたが、まだ一ぱいにならない。もつとたして、もつとたして、遂々二斗入のお米の袋が、空になつてしまふまで、正直お爺さんにやつ

た。するとお爺さんが云ふには

「爺坊ちやん、あなたは大層親切な善い子だ、それぢあ、今にどんな事が起るか教へてあげよう、

あの、お寺の入口の石の獅子を知てるだろう」

子供「え、あのお寺の入口の獅子僕よく知つてま

すよ」

爺「さう、私の云ふ事をよくお聞きなさい。あの獅子の目が赤くなつたら、それは大水のある報シラ知なのですよ」

と、云ひながら、お爺さんは懐から小さい紙の舟を出して、

爺「もし、大水が來たら、坊ちやん、あなたは御自分の持て居るものを、皆この舟に乗せてたすけるんですよ、どんな獣でもたすけて下さいと云つたら、助けておやりなさい。どんな蟲でも助けて下さいと云つたら、助けておやりなさい。けれども、人が援けて下さいと云つたら、どんな人でも、たすけてはいけません」

と云つた。次の朝、この子は學校へ行きがけに、石の獅子の目を見たが、何ともなつてゐなかつた。その次ぎの朝も、學校の行きがけに、獅子を見たが、如何もなつて居なかつた。毎朝々々、氣をつけて見たが、何ともなつて居なかつた。或日、友達が此の子に尋ねた。

友「君は、なせ石の獅子の目ばかり氣にして見るの」

子供「でも、もし石の獅子の目が赤くなつて居ると、

それは大水があるといふしるしなのだから」

友達はこの子の答をきいて、そんな事があるものかと笑つて居た。そして其の日、學校のかへりに、友達は石の獅子の目を赤くぬつた。

次の朝、いつもの様に、小さい男の子は、石の獅子の目を見た。そしてちつと見てゐたが、どう見ても、獅子の目が赤くなつてゐるので、大急ぎで家へ歸つて、早速お母様に話した。

子供「お母様、石の獅子の目が赤くなつたから、今

に大水が來ますよ」

それからいつか、正直お爺さんから、もらつた小さい紙の舟を出して、地面に置くと、見てゐる中に、大きな木の船になつた。そして子供やお母さんやお父様が家の物を皆船につんでしまふと大水が出た。小さな蟻が穴から這ひ出して來たのんだ。

蟻「どうぞ、其のお船にのせて援けて下さいまし」

それから蟻を皆船にあげて援けてやつた。すると、今度は小さい廿日鼠が、たくさんポシャ／＼泳ぎながら、出て來てたのんだ。

鼠「小さい坊ちゃん、どうぞ、私達をお船に乗せて援けて下さいまし」

それから、たくさんの小さい廿日鼠を皆船にあげて援けてやつた。其の次には、大きな強さうな虎が森の方から急いで走つて來てたのんだ。

虎「小さい坊ちゃん、どうぞそのお船にのせて援けて下さい」

それから怖ろしいやうな、大きな虎を、船にあげて援けてやつた。今度は獅子の目を赤くぬつた友達が出来たのんだ。

友「どうぞ小さい坊ちゃん、僕を船にのせて援けて下さい」

子供「いえ、それはいけません、正直爺さんが、このお船には他所ヨソの人を、一人も乗せてはいけません」と云ひました。

友「でも、どうぞ、後生だから、どうぞ援けて下さい」

とあんまり、たのむので、小さい坊ちゃんも、お母さんも可哀想になつて船にあげて援けてやつた。大水がすんでからも、このお友達は小さい坊ちゃんの家的一所に住んで居た。そして時々悪い、たづらをした。或る時、此のいたづらつ子が大層悪い、たづらをしたので、小さい坊ちゃんの家の人々は皆罰に牢屋の中へしばられてしまつた。すると、そこへ小さい廿日鼠がいくつも出て来て

鼠「まあ、よい子の小さい坊ちゃん、いつか私を援けて下さつたお禮に、この繩をかみ切つて、あなたをお援けいたませう」

と云ひながら、ぐる／＼しばつてあつた繩を、こまかくかみ切つて、めちやく／＼にしてしまつた。すると又小さな蟻が、後から／＼いくつも出て来て

蟻「まあ、よい子の坊ちゃん、いつか、私を援けて下さつたお禮に、地面を柔かに掘つてあなたをお援けいたませう」

と云ひながら牢屋の壁の下に蟻の巢を澤山こしらへた。すると強さうな大きい虎が出て来て

虎「まあ、よい子の小さい坊ちゃん、いつか私を援けて下さつたお禮に、大きな穴をほつてあなたをお援けいたませう」

と云ひながら、蟻が柔かにして置いた地面を掘つて、大きな穴をこしらへた。その爲めに、牢屋の壁は落ちて壊れてしまつた。小さい坊ちゃんとそ

の家の人達は皆牢屋から出て、家に歸る事が出来た。それから後は何も起らず、皆面白く暮した。

(支那お伽噺)

### ○モナチアとマナチア

昔、或る處に、モナチアとマナチアいふ二人の子供がありました。或日二人で大きな籠を持つて葡萄をつみに行きました。けれどモナチアがせつせと摘むとマナチアはそばから、それを食べてしまひました。

モナチア「私は葦を見つけて来て、マナチアの手を結へてしまふ。さうしないとみんな、マナチアが食べてしまふから」

かう云つて、モナチアは小川の岸に生えて居る葦の處へ行きました。

葦「何かいゝ話があるかね」とモナチアに聞きま  
した。

モナチア「何もいゝ話はない。が、私の摘む葡萄を皆マ

ナチアが食べてしまふから、手を結へてしまはふと思つて、葦を一本もらひに來たのよ」と、  
聞くよ

葦「いゝえ、それはいけない、私の葦を切る斧を持つて來なければ、持つて來たらあげよう」

かう云はれて、モナチアは材木の積みかさなつた、そばにある斧の處へ行きました。

葦「何かいゝ話があるのかね」

モナチア「何もいゝ話はない。が、私は斧が欲しい。其の斧で葦を切つて、其の葦でマナチアの手を結く。マナチアは私の摘む葡萄をみんな食べてしまふから」

葦「いゝえ、それはいけない。刃をとぐために私に石を持つて來なければ、持つて來たらあげやう」

それからモナチアは壁のそばにある石の處へ行きました。

石「何かいゝ話があるかね」